

論 文

文章表現法における図書館利用

—アウトプットのためのインプット—

The Use of Libraries in Academic Writing Classes: An Approach Introducing the Concept of 'Input for Outputs'

市川 絃美

Hiromi ICHIKAWA

キーワード：文章表現法、図書館利用、インプット、アウトプット

Academic Writing, input, output

文章表現法、日本語表現法といった、いわゆる文章の表現技法を教授する授業では、その目的の第一に「書く」能力の育成が置かれる。これは大方の大学において変わりないと推察する。少なくとも筆者が勤務する各大学では、当該科目シラバスの「到達目標」のはじめに「簡明さと論理性を備えた文章表現および口頭表現ができる」とあり、筆者自身もその重要性に疑いはない。だが、実際に授業を展開していくと、「書く」能力と共に情報を「調べる」「吟味する」「活用する」能力の育成が必要であることに否応なく気づく。

一通りの表現技法を学んだ学生に対し、実践として課題文の要約、そして千字・二千字の小レポートを義務付けているが、要約はある程度まとめあげた学生であっても、小レポートとなると「考察」ではなく「感想」となってしまうことが度々見受けられるのである。レポート・論文の基礎的な構成である三段構成について学んでいるものの、そこで論じるべき内容に深みがないのである。その一因を如実に表しているのが引用・参考文献に記された各資料である。多くがインターネット上に公開されたものばかりで、引用・参考文献が全く記されていないこともある。その入手のしやすさから、安易にインターネット上の情報で済ませ

うとする学生が多数を占めるという問題が浮かび上がるのである。

こうした問題を解決すべく、筆者は課題を与える前に、授業内で「図書館利用のススメ」として情報検索を取り上げるようにした。課題に取り掛かる前に、準備段階を経る必要性を説くことで、各学生が自ら資料を調べ、その内容を吟味・活用する道筋を提示する。そうすることで、「アウトプット」するためにはまず情報を「インプット」することが欠かせないと自覚させるのである。学生にこうした意識がないことには、いくら形式が整っていても、内容を伴わない文章となってしまう恐れがあり、真のアカデミック・ライティングとは言えないのである。

具体的には以下のように進める。

まず、インターネット上の情報に対する姿勢を説き、その上で紙媒体の情報にも目を向けさせる。次に、情報検索をする前には、「何のために調べるのか」・「何を用いて調べるのか」を確認することで目的を明確にするよう注意する。そして、各情報媒体の長所・短所（質・量・寿命・公平性・権威・値段・保存の方法・入手のしやすさ等）を理解させた上で、集めた情報はあくまでも参考意見

とし、自分で分析・考察することが重要であると説く。こうした事前説明をした後、実際に情報検索を学生と共に行うわけだが、その際に図書館課に協力を要請し、図書館内で行うことが望ましい。

情報検索では、1シソーラスや類語辞典なども活用して入力するキーワードを工夫する、2求める情報によって適切な検索エンジンを使い分ける、3実践、という一連の流れで行う。実践の際には、目的の資料の目次や前書き、そして参考文献を確認し、更にブラウジングをするように促す。また、目的の資料が所蔵されていない場合には、そこで諦めずに文献複写や現物貸借、紹介状、図書購入申込みなどを活用するように説く。

反対意見を含めた資料を手に入れた後には、1収集した情報に目を通す、2情報の質を見極め、信頼性の乏しいものは捨てる、3情報を関連づける、4重要度別に分類する、5使う段階を想定して、整理・保存する、6調べた情報を自分の考えの基礎となる意志決定・主張の材料とする、7注や参考文献に的確に記載する、といった資料活用法を教授する。

実際、こうしたステップを加えた後では、小レポートの内容の深まりに明確な違いが生じた。学生の学ぶ姿勢を教員が後押しすることで、伸び代を引き出すことができるのである。表現技法のみならず、情報検索および活用法を同一授業内で取り入れるという両輪が、より実践的な文章表現法の要となるのである。